＜要旨＞　学校教育部門作品

「ふくおか教育論文」

学級生活への参画意識をもつ子どもを育てる学級活動の創造

納得解を創り出す話合い活動を通して

筑紫野市立天拝小学校
教諭　　三重野　暢夫

こんな手立てによって…

学級生活への参画意識を促す議題化のもと、思考の「可視化・操作化・構造化・具体化」の支援を位置づけた「納得解を創り出す話合い活動」を行うことで

こんな成果があった！

話合い活動で、よりよい「納得解」を創ることで、より自主性・協調性・創造性という学級生活への参画意識を高める子どもが育った。

１　考えた

特別活動で重視する「よりよい人間関係を築く力」「社会に参画する態度」「自治的能力」は、学級活動(1)の話合い活動を中心とした自治的活動を協同して実践することで身に付けられる。

また、子どもたちの実態として、話合い活動において、原案のよさをとらえる力、比較して練り上げる力、話合い後の実践意欲や行動力に課題がある。

そこで、本研究主題を設定し、話合い活動においてよりよい集団決定「納得解」を創り出すことが、自主性・協調性・創造性の面から「参画」の姿を高めると考え、以下の工夫を行った。

【着眼点１】学級生活への参画意識を促す議題化

【着眼点２】納得解を創り出す一単位時間の話合い活動の学習過程

【着眼点３】思考の「可視化・操作化・構造化・具体化」による支援

２　やってみた

実践事例１「みんなの遊びの鬼ごっこのルールを工夫しよう」では、比べ合う段階に、出し合った意見を２つの視点で表に分類・整理する構造化の支援と、ホワイトボード上でマグネットを操作する操作化の支援を中心に行った。その結果、「歩み寄り型」の納得解や「全員賛成型」の納得解を創り出すことができた。

実践事例２「３の１の歌を作ろう」では、原案のよさを２つの視点で表に分類・整理する構造化の支援と、他の歌の歌詞の一部を取り入れ、新しい歌詞をつくる操作化の支援を中心に行った。その結果、「付加修正型の納得解」を創り出すことができた。

３　成果があった！

操作化・構造化の支援から判断する根拠や基準が明確になり、より納得度の高い「納得解」に具体化できるほど、子どもたちの参画意識がより高まることが明らかになった。

<目次>　学校教育部門作品

学級生活への参画意識をもつ子どもを育てる学級活動の創造

納得解を創り出す話合い活動を通して

１　主題設定の理由 ･･ ３
（１）特別活動の本質から ･･･ ３
（２）子どもの実態と指導上の反省から ････････････････････････････ ３

２　主題の意味 ･･ ４
（１）主題「学級生活への参画意識をもつ子どもを育てる学級活動の創造」について‥ ４
（２）副主題「納得解を創り出す話合い活動を通して」について ･････････････････ ６

３　研究の目標 ･･ ７
４　研究の仮説 ･･ ７
５　研究の構想 ･･ ７
（１）学級生活への参画意識を促す議題化【着眼点１】 ･････････････････････････ ７
（２）納得解を創り出す一単位時間の話合い活動の学習過程【着眼点２】 ･･････････ ８
（３）思考の可視化・操作化・構造化・具体化による支援【着眼点３】 ･･･････････ ８
（４）研究構想図 ･･･１０
（５）仮説検証の方途 ･･１０

６　研究の実際 ･･１１
実践事例１「みんなの遊びの鬼ごっこのルールを工夫しよう」
（１）目標と計画 ･･１１
（２）指導の実際と考察 ･･･１２
実践事例２「３の１の歌をつくろう」
（１）目標と計画 ･･１６
（２）指導の実際と考察 ･･･１６

７　全体考察 ･･２０

８　成果と課題 ･･２０
<参考文献> ･･･２０

＜本文＞　学校教育部門作品

学級生活への参画意識をもつ子どもを育てる学級活動の創造

納得解を創り出す話合い活動を通して

筑紫野市立天拝小学校
教諭　三重野　暢夫

１　主題設定の理由

（１）特別活動の本質から

「小学校学習指導要領解説　特別活動編」の特別活動改訂の趣旨には、改善の基本方針として、以下のように示してある。

> ○　特別活動については、その課題を踏まえ、特別活動と道徳、総合的な学習の時間のそれぞれの役割を明確にし、望ましい集団活動や体験的な活動を通して、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性の育成を図るという特別活動の特質を踏まえ、特によりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成を重視する。また、道徳的実践の指導の充実を図る観点から、目標や内容を見直す。
> **【資料１：「小学校学習指導要領解説　特別活動編」より】**

「よりよい人間関係を築く力」「社会に参画する態度」「自治的能力」という３点が、特別活動において重視されている資質・能力である。

また、特別活動を構成する学級活動、児童会活動、クラブ活動の目標にも、「望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい生活（学校生活、クラブ）づくりに参画し」という文言が共通して記されている。

そこで、学級活動において「自治的」な活動の過程で「望ましい人間関係を形成」し、よりよい生活づくりに「参画」しようとする子ども像を具体化する必要があると考えた。学級活動において自治的能力を養うのは、〔共通事項〕の(1)の「学級や学校の生活づくり」にあたる。これについて、**【資料２】**のように記述されている。

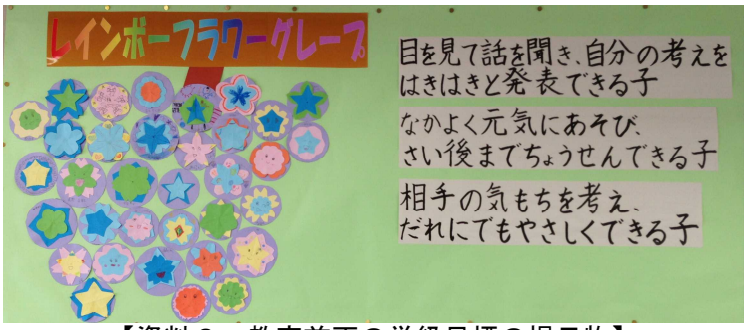
> この活動は、児童がよりよい生活を築くために、諸課題を見いだし、これを自主的に取り上げ、協力して解決していく自発的、自治的な活動である。このような児童による自発的、自治的な活動によって、望ましい人間関係の形成やよりよい生活づくりに参画する態度などにかかわる道徳性を身に付けることができる。
> **【資料２：「小学校学習指導要領解説　特別活動編」より】**

以上のことを踏まえ、特別活動で重視される３つの資質・能力を子どもたちに身に付けさせるには、学級活動(1)の自発的、自治的な活動過程を通して、よりよい生活づくりに参画する子どもの姿を明らかにすることが重要であると考え、本主題を設定した。

（２）子どもの実態と指導上の反省から

本学級の子どもたちは、自分たちの学級を「元気でなかよく、笑顔の学級」「協力し、助

け合う学級」「挑戦する、がんばる学級」「ルールを大切にする学級」にしたいという思いをもって、教師とともに学級目標をつくった。**【資料３】**に示すように、キャッチフレーズを「レインボーフラワーグレープ」とし、達成に向けての活動を行っている。



【資料３：教室前面の学級目標の掲示物】

このキャッチフレーズを考える話合いでは、「レインボースマイル」「フラワー」「ぶどう」から選択するという原案選択型の話合いを行った。話合いの結果、どれか一つに選ぶことができず、合体案として集団決定することになった。

また、議題「みんなの遊びのドッジボールのルールを工夫しよう」での話合いでは、「みんなが楽しめるルールにしよう」というめあてを設定して、問題点からルールを創り出す練り上げ型の話合いを行った。「当たってよい回数」「ボールの数」「コートの形」という視点からルールを考えたが、複数の案から決定することができず、「決まったルールで１回ずつやってみよう」という形で話合いが終わった。しかも、いつ、どのルールで実践するかまで話し合うことができなかったため、１つのルールでの実践に終わり、最後まで意欲的に活動することができなかった。

この２回の話合いに共通する問題点として、子どもの姿と教師の手立てから以下のように考えた。

子どもの姿	・自分が賛成していない原案のよさに気づく力 ・どれが「よりよいもの」に当たるのか、比較して考え判断する力 ・決定したことを実践していく意欲や行動力
教師の手立て	・それぞれの原案のよさに注目できる、意見の整理 ・よりめあてに合っているものかを判断するための基準の提示 ・集団決定までの過程の整理と、集団決定の形の提示

そこで、話合い活動や実践における子どもたちの姿を変えていくためには、話合いを通して「よりよいものができた」という実感をもたせ、「早くやってみたい」と意欲につながる具体的な集団決定を行う必要があると考え、本副主題「納得解を創り出す話合い活動」を設定した。

２　主題の意味

（１）主題「学級生活への参画意識をもつ子どもを育てる学級活動の創造」について

①　「参画」とは

目的や目標の達成のために、集団の一員としての自覚をもって加わり、仲間と協同して活動を計画し、実行することである。

一般的な国語辞典に掲載されている「参画」の意味は、「事業・政策などの計画に加わる

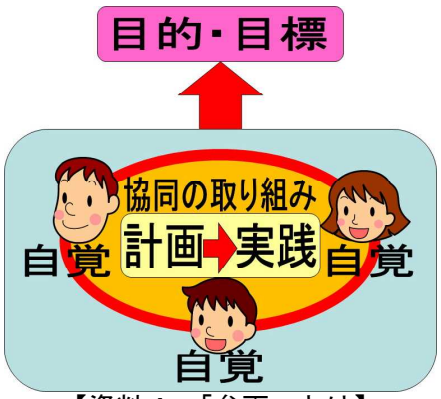
こと」である。

「参加」や「仲間入り」等の類義語との共通点と相違点を以下のように考える。

共通点は、「ある集団にその一員として入ること」である。

相違点は、「成員同士の結びつきの強さ」「一員であることの自覚」「ある目的について計画から実践まで行うこと」である。

そこで、「参画する」ことを、**【資料４】**のようなイメージとしてとらえる。

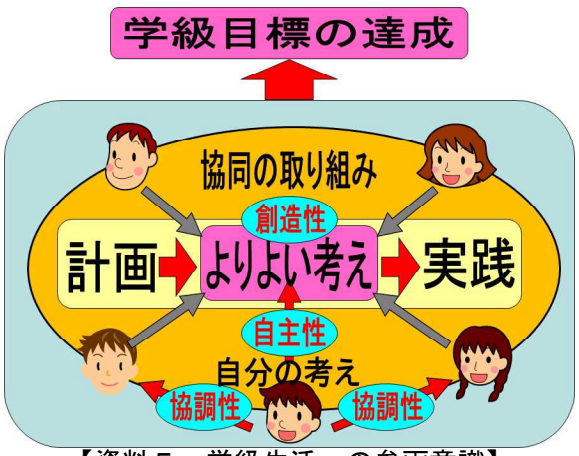


【資料４：「参画」とは】

②　「学級生活への参画意識」とは

学級目標の達成に向けて、学級生活上の課題を発見し、解決に向けた取り組みを自分の考えをもって計画し、仲間とともによりよい考えになるよう練り上げ、実践しようとする態度である。

子どもたちは、「こんな学級になりたい」という思いをもって、教師とともに学級目標をつくる。この達成に向け、学級生活における諸問題を発見し解決したり、課題を発見し取り組みを考えたりする。そして、実践することにより、学級目標の達成へと近づいていく。



【資料５：学級生活への参画意識】

「学級生活への参画意識」とは、この実践を計画する段階から、「学級をよりよくするために、こうしたい」という自分の考えをもち、友達と考えを練り上げ「よりよい考え」を創り出し、学級目標達成に向けて協同で実践しようとする態度である。

③　「学級生活への参画意識をもつ子ども」とは

「学級生活への参画意識をもつ子ども」とは、**【資料５】**に示したように、「学級目標を達成しよう」という共通の目的に向かって、「自分の考えを主張する」「仲間と協同して取り組む」「自他の考えを生かし、よりよいものを創り出す」という３つのベクトルをもった姿であると考える。

具体的には、学級目標達成に向けた取り組みの「話合い～実践」の過程で、次の**【資料６】**のような資質や能力を身に付けた子どもである。

【資料６：「学級生活への参画意識をもつ子ども」の姿】

資質・能力	「話合い」での姿	「実践」での姿
自主性 【関心・意欲・態度】	○　めあてに対して自分の考えをもち、意欲的に伝えようとし、実践への意欲を高めることができる子ども	○　活動の目的を考え、進んで取り組み、楽しもうとすることができる子ども
協調性 【思考・判断・実践】	○　友達の考えを聞き、それぞれの原案や意見のよさを感じることができる子ども	○　友達のことを考えて行動したり、友達のよさを感じたりすることができる子ども
創造性 【思考・判断・実践】	○　めあてと照らし合わせ、より納得のいく考えに集団決定しようとする子ども	○　さらによりよいものを考えようとしたり、自分にできることを考え行動しようとしたりする子ども

（２）副主題「納得解を創り出す話合い活動を通して」について

①　「納得解」とは

話合い活動において、原案を付加・修正しながら、より学級全体が納得できるよう折り合いをつけて集団決定されたもの。

話合い活動では、２～３つの原案から「どれが一番めあてに合っているのか」という観点で１つの原案を選択する、「原案選択型」の話合いを行ってきた。この話合いでは、集団決定された１つの原案以外は生かされないことになる。

そこで、全ての原案のよさを生かす「納得解」に集団決定することで、自分の意見が生かされていることや、友達と練り上げてよりよいものができた実感を得ることにつながり、実践意欲へとつながると考える。

具体的には、【資料７】のように、次の３つに類型化する。

【資料７：「納得解」の３つの類型】

ア　「全員賛成型」　・・・１つの原案に、全員が賛成する、あるいは、他の原案に賛成している子も納得できた集団決定

イ　「歩み寄り型」　・・・２つの原案に対して、優先する割合を考えながら、折り合いをつけた考えをつくる集団決定

ウ　「付加修正型」　・・・ベースとなる原案を１つ決定し、不十分な点や、他の原案のよさを取り入れて、内容を付加修正した集団決定

②　「納得解を創り出す話合い活動」とは

一単位時間の話合い活動において、話合いの柱ごとに「出し合う、比べ合う、決める」の３つのサイクルを位置づけた学習過程のこと。

一単位時間の話合い活動で納得解を創り出すために、学習指導過程を「出し合う、比べ合う、決める」の３つの段階から構成した。

議題の内容を細分化し、１～２つの話合いの柱を立てる。そして、話合いのめあてに沿

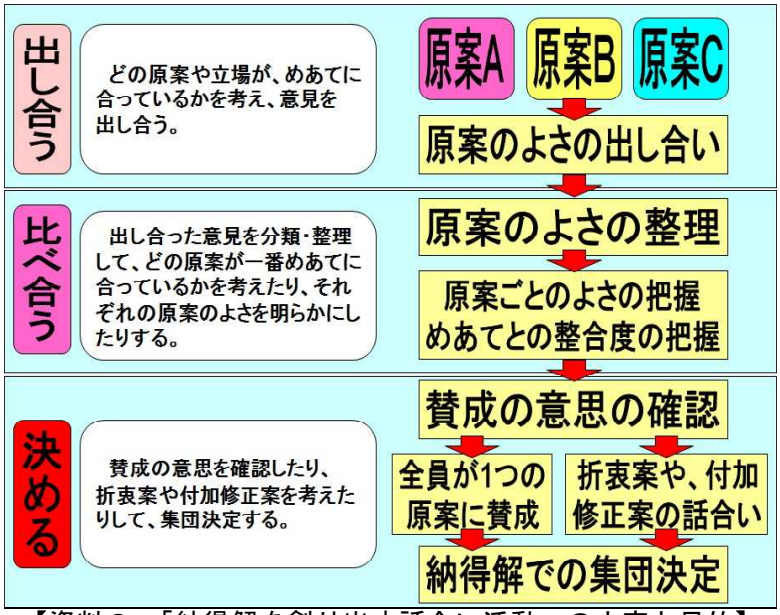
って、話合いの柱ごとに「出し合う、比べ合う、決める」の３つのサイクルで行うようにした。

出し合う段階では、事前に考えた、めあてに合った原案のよさを出し合う。

比べ合う段階では、出された意見を分類・整理し、それぞれの原案がどれくらいめあてに合っているかを把握したり、それぞれの原案の独自のよさを明らかにしたりする。

決める段階では、比べ合う段階で整理した内容から判断し、どの原案に賛成するかを再度確認する。そこで、全員一致の賛成が得られれば、「全員賛成型の納得解」に集団決定する。それ以外の場合は、比べ合う段階で整理した内容をもとに優先する割合を考えた「歩み寄り型の納得解」や、ベースとなる原案に他の原案のよさをどのように取り入れられるかを考えた「付加修正型の納得解」に集団決定する。

この内容を図に整理すると、**【資料８】**のようになる。



【資料８：「納得解を創り出す話合い活動」の内容と目的】

３　研究の目標

納得解を創り出す話合い活動を通して、学級生活への参画意識をもつ子どもを育てる学級活動の指導の在り方を究明する。

４　研究の仮説

一単位時間の話合い活動において以下の着眼点１，２，３から納得解を創り出すための指導の工夫を行えば、自主性、協調性、創造性を身に付けた学級生活への参画意識をもつ子どもが育つであろう。

【着眼点１】学級への参画意識を促す議題化
【着眼点２】納得解を創り出す一単位時間の話合い活動の学習過程
【着眼点３】思考の可視化・操作化・構造化・具体化による支援

５　研究の構想

（１）学級生活への参画意識を促す議題化【着眼点１】

話合い活動は、学級に設置している議題箱に入れられた意見から議題を選定し、議題化する。子どもから出されたものを全て議題化するのではなく、**【資料９】**に示す観点から教師

と計画委員会の子どもたちで判断し、学級生活への参画意識である自主性、協調性、創造性の資質・能力を高められるようにする。

【資料９：「学級生活への参画意識を促す議題化」の観点と内容】

観点	内　　容（教師の議題選定の基準）
自主性	○　子どもたちが解決の必要性を感じられる議題 ・自分なりの解決方法を考えることができるものか。 ・学級目標の達成とのつながりを意識できるものか。
協調性	○　活動を行うことで集団の関わりが深まる議題 ・活動の中で友達のよさを感じられるものか。 ・友達と関わりながら取り組みができるものか。
創造性	○　自分たちのよさや可能性を生かし、取り組みを工夫できる議題 ・解決の視点を与えれば、工夫できるものか。 ・「こうすればもっとよくなる」と子ども自ら具体的に考えられるものか。

（２）納得解を創り出す一単位時間の話合い活動の学習過程【着眼点２】

これは、**【資料７】**に示すような納得解を創り出すために、**【資料８】**に示した学習過程により、話合い活動を行うことである。具体的には、後の研究の実際の中に示す。

（３）思考の可視化・操作化・構造化・具体化による支援【着眼点３】

学級活動(1)の話合い活動において、「納得解」の形でよりよい集団決定ができるような支援を行うことである。

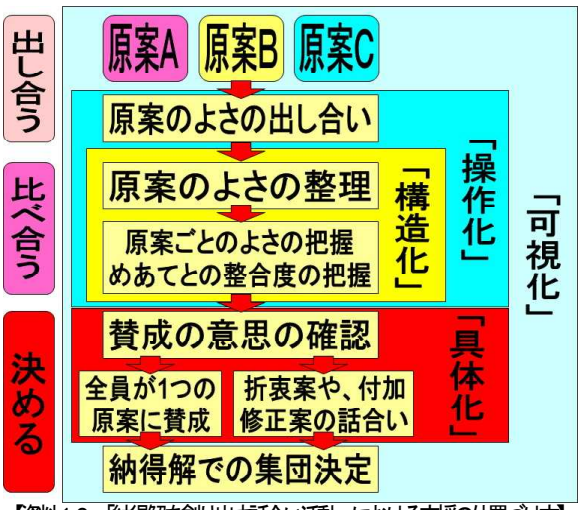
よりよい集団決定のためには、自分の考えや主張をはっきりともち、伝えることが必要である。そして、お互いの考えを共通理解し、より適切な方法は何かを集団で考える。そのために、話合い活動の中に以下の４つの視点からの支援を行う。

「可視化」とは、自分の考えや立場を、言葉や絵図、色で表し、共通理解するための支援である。

「操作化」とは、具体物を操作し、実際の活動をイメージしたり、意見を付加してどのように原案がつくりかえられているかを明らかにしたりし、意見の根拠を明確にしたり、めあてとの整合性を考えたりするための支援である。

「構造化」とは、分類・整理した結果から、どの考えがよりめあてに合っているかを判断する基準を明確にする支援である。

「具体化」とは、操作化や構造化したことをもとに、めあてとの整合性を考え、全員の意思を確認したり、具体的な折衷案や付加修正案を創り出したりするための支援である。



【資料10：「納得解を創り出す話合い活動」における支援の位置づけ方】

このような思考の可視化・操作化・構造化・具体化を通して、自己中心的な考えではなく、

課題解決のために客観性や必然性のある、よりよい集団決定、つまり「納得解」につながり、参画意識を高めていけるものであると考える。

具体的には、学級活動(1)の話合い活動において、**【資料１１】**のような方法で行い、話合い活動中には、**【資料１０】**のように位置づける。

【資料１１：可視化・操作化・構造化・具体化の支援】

視点	ねらい	方法
可視化	○　自分の考えを全体にわかりやすく伝えられるようにする。 ○　だれが、どのように考えているか、把握できるようにする。 ○　実際の活動の様子をイメージできるようにする。	・原案や立場を赤・黄・青の３色で示す。 ・原案や立場に対応した色短冊で意見を黒板に貼る。 ・全員が机上に赤・黄・青の３色の紙コップを持ち、原案や考えに対しての立場を色で示す。 ・実際の活動の様子を、マグネット等を使って、ホワイトボード上に示す。
操作化	○　実際の活動をイメージし、原案のよさを考えられるようにする。 ○　原案がどのようにつくりかえれているか、共通理解できるようにする。	・ホワイトボード上でマグネットを動かしながら、小集団で話し合う。 ・原案の拡大図に、色短冊等を付け加えていきながら、全体で話し合う。
構造化	○　どの原案や立場が、めあてに合っているかを判断できるようにする。	・意見の書かれた短冊を、めあての観点から表を用いて分類・整理する。
具体化	○　イメージしたことや、分類・整理したことをもとに、具体的な案をつくり、集団決定できるようにする。	・同じ立場や違う立場の子どもたちで、自由に意見交流するフリートークを行う。 ・２２人以上の賛成で決定とするが、他の原案に賛成する子の意思を確認する場を設ける。

（４）研究構想図

（５）仮説検証の方途

【資料１２：仮説検証の具体的方途】

観　点	実証方法	具体的な内容
○　参画意識を促す議題化により、子どもの参画意識が高まったか。 【着眼点１の有効性】	○　実践への満足度と、めざす子ども像から見たアンケートによる自己評価から分析する。	○　実践後に振り返りを行う。 ・自主性、協調性、創造性の３観点について、４段階で自己評価する。 ・話合い活動を行う前を３点として、実践の満足度を５段階で自己評価する。
○　話合い活動における集団決定が、「納得解」を創り出すことになっているか。 【着眼点２、３の有効性】	○　話合いにおける操作化・構造化の支援に対しての自己評価から分析する。 ○　めざす子ども像から見たアンケートによる自己評価から分析する。	○　話合い活動の振り返りを行う。 ・操作化、構造化について、４段階で自己評価する。 ・集団決定への納得の度合いについて、４段階で自己評価する。 ・自主性、協調性、創造性の観点について、４段階で自己評価する。
○「納得解を創り出す話合い活動」が、子どもの参画意識の高まりにつながっているか。 【着眼点１、２、３の有効性】	○　実践１、２それぞれの集団決定の納得の度合いと、実践前後の自己評価の関連性を分析する。	○　実践ごとの子どもの変容と、話合いや実践の満足度の関連性を分析する。 ・実践ごとの、集団決定の納得の度合いと実践の満足度の関連性を分析する。 ・話合い前後の、自主性、協調性、創造性の変容を分析する。

６　研究の実際

実践事例１「みんなの遊びの鬼ごっこのルールを工夫しよう」

（１）目標と計画

【資料１３：実践事例１における研究構想の具体化】

議題「みんなの遊びの鬼ごっこのルールを工夫しよう」

【議題化の観点】

- 全員が経験しており、自分なりの解決方法を考えやすい。（自主性）
- 遊びの中で、たくさんの友達と関わることができ、よさを感じやすい。（協調性）
- 「捕まえる側」「逃げる側」「走るのが得意」「運動が苦手」等の立場から解決策を考えやすい。（創造性）

話合いのめあて「みんながもっと楽しめる鬼ごっこにしよう。」

話合いでめざす子どもの姿

○　めあてに合った意見を考え、進んで伝え、実行しようとする子ども（自主性）

○　友達の意見を聞きながら、よりめあてに合ったものにしようとする子ども（協調性）

○　様々な立場から原案について考え、よりよい集団決定をしようとする子ども（創造性）

話合いの柱①「はさみうちはどうするとよいか」**【歩み寄り型の納得解】**

段階	学習活動	可視化・操作化・構造化・具体化の支援
出し合う	１　「はさみうち」に賛成か反対か、意見を出し合う。	○　賛成を赤、反対を青とし、自分の立場を紙コップで示させる。（可視化） ○　賛成意見を赤、反対意見を青の短冊に書き、黒板に貼らせる。（可視化）
比べ合う	２　出された意見を、「自分のことを考えているか」「友達のことを考えているか」の観点から、分類・整理する。	○　賛成意見、反対意見を「自分」「友達」に分類する表を提示し、意見を整理させる。（構造化）
決める	３　分類・整理した結果から、はさみうちの取り入れ方を決める。	○　違う立場の子同士でフリートークを行わせ、小集団で解決策を考えさせる。（具体化）

話合いの柱②「守る人数は何人がよいか」**【全員賛成型の納得解】**

段階	学習活動	可視化・操作化・構造化・具体化の支援
出し合う	１　牢屋を守る人数は何人がよいか、意見や理由を考え、出し合う。	○　３人を赤、２人を黄、１人を青とし、自分の立場を紙コップで示させる。（可視化） ○　ホワイトボード上でマグネットを操作しながら、「助けやすさ」や「守りやすさ」をイメージし、考えの根拠にできるようにする。（操作化） ○　自分が賛成する原案を、黒板にネームプレートを貼って示させる。（可視化）
比べ合う	２　賛成する理由を伝え合い、どれがめあてに合っているかを話し合う。	○　操作しながら考えたことを発表させ、どの人数がめあてに合っているか、考えられるようにする。（操作化）
決める	３　どの原案に賛成するかを最終確認して、集団決定する。	○　自分の賛成する人数の色を紙コップで示し、その人数比をもとに判断できるようにする。（可視化） ○　１つの原案に２２人以上の賛成がある場合も、それに決めてもよいか、意思の確認を再度行わせる。（具体化）

実践でめざす子どもの姿

○　工夫したルールを守り、進んで鬼ごっこに参加し、楽しもうとする子ども（自主性）

○　友達と一緒に楽しみながら、よさを見つけられる子ども（協調性）

○　鬼ごっこを通して、もっとみんなで楽しくできるようにしようと考える子ども（創造性）

（２）指導の実際と考察

①　議題化の経緯

議題にある「鬼ごっこ」について説明する。「捕まえる側」と「逃げる側」に分かれ、タッチされた子は、朝礼台（牢屋）から動けなくなる。「逃げる側」は、捕まった友達にタッチして助けようとするが、「捕まえる側」はそれを邪魔してさらに捕まえようとする遊びである。みんなの遊びで実施したところ、「はさみうちをされて楽しくなかったです。」「全然、助けられなくて、捕まったら終わりだから嫌でした。」という子どもたちの意見が聞かれた。

そこで、遊び係が提案し、議題化することとなった。新たに遊び係が考えたルールを原案として提示し、アンケートを採ったところ、「はさみうち」と「牢屋を守る人数」について改善したいという思いが多くみられた。

これを受けて、話合い活動においては、「はさみうちをどうするか」「守る人数は何人がよいか」の２つを話合いの柱として設定することにした。

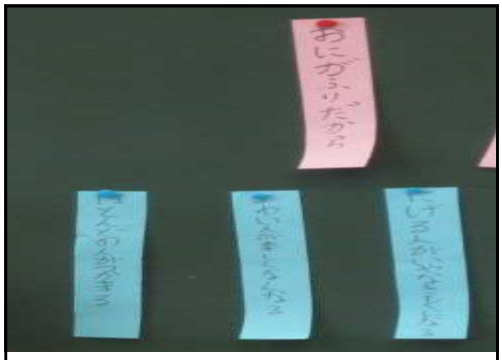
②　話合いの柱①「はさみうちはどうするか」について

ア　出し合う段階

まず、事前に書かせた考えをもとに、**【資料１４】**のように、賛成の立場を赤、反対の立場を青で、机上に示させた。また、発表した考えについては、黒板記録の児童が、賛成の理由を赤の短冊に、反対の理由を青の短冊に書き、黒板に貼っていった。

【資料１５】のように、子どもたちからの賛成意見として「鬼が不利になる」「ドキドキして楽しい」が出され、反対意見として「逃げられないから嫌」「弱い（苦手な）人が楽しくなくなる」「ほとんどの人が捕まる」「逃げる人が嫌になる」が出された。

【資料１４：立場を示す紙コップ】



【資料１５：色分けして板書した短冊】

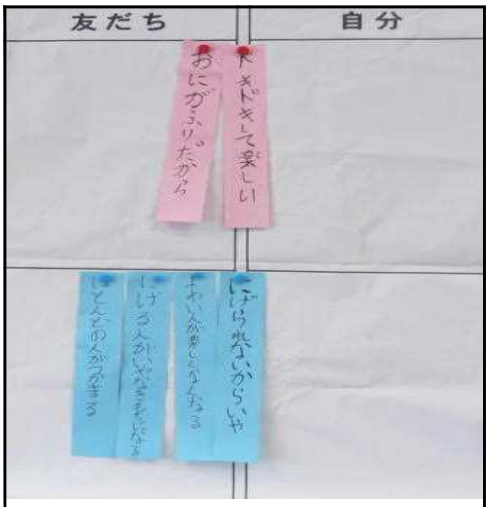
イ　比べ合う段階

出し合う段階の意見から、賛成・反対のどちらがめあてに合っているのかを判断できるよう構造化するため、**【資料１６】**の表を提示し、「友達のことを考えているか」「自分のことを考えているか」という観点で意見を分類させた。

友だち	自分

【資料１６：提示した表】

子どもたちの意見から、**【資料１７】**のように、賛成意見と反対意見が分類された。「はさみうちをしない」方が、めあてにある「みんな」つまり、「友達」のことを考えていることがわかった。この結果から、賛成・反対のどちらも「みんなが楽しめる」が、反対意見の方を優先するべきであることを教師の助言のもとに確認することができた。そして、「はさみうちはしてもよいが、あまりしない方がよい」という集団決定に向けての基準を確認することができた。



【資料１７：分類・整理された意見】

ウ　決める段階

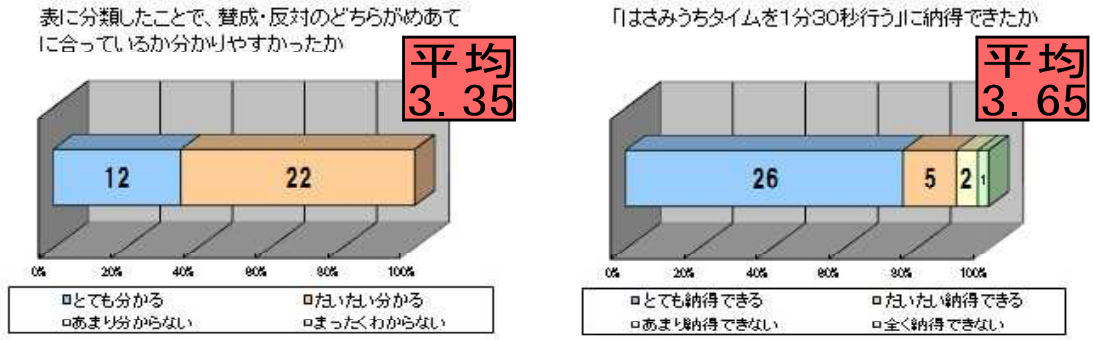
集団決定に向け、具体化するために、違う立場の子どもたち同士でフリートークする場を設けた。

フリートーク後の意見として、「ある時間だけはさみうちをしてもよい『はさみうちタイム』を作ってはどうか。」と具体化する意見が出された。この意見に皆が納得したので、司会の子どもが「何分間が適当か」を考える意見を求めた。「２分間がよい。」「長いから１分間だけにしよう。」「では、間をとって１分３０秒でどうか。」と全体の場で意見が出されたので、３つのどれが話合いの流れから適切かを紙コップで意思表示させた。

その結果、「１分３０秒」に賛成する子が多く、反対した子も納得できたので、「１０分のうち、１分３０秒だけ『はさみうちタイム』を作る」という「歩み寄り型」の納得解に集団決定することができた。

エ　話合いの柱①についての考察

表を用いた構造化の支援を行ったことについての自己評価は、**【資料１８】**に示す通りである。



【資料１８：実践事例１の話合いの柱①における自己評価】

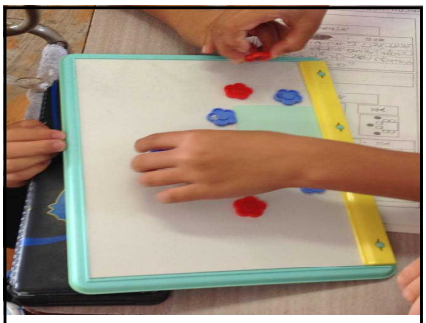
このことから、話合い活動において構造化の支援を行ったことは、めあてとの整合性を把握し、歩み寄り型の納得解を創る上での基準となり、高い納得の度合いにつな

がったと考える。

③　話合いの柱②「守る人数は何人がよいか」について

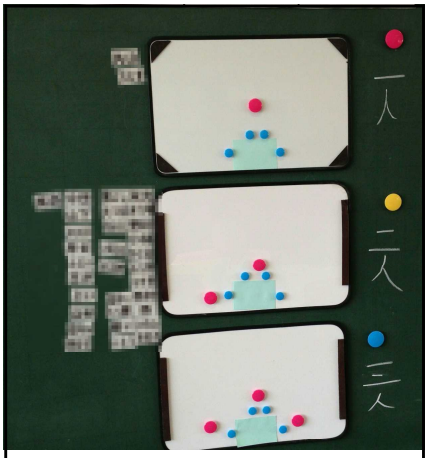
ア　出し合う段階

鬼ごっこの場をイメージできるよう、**【資料１９】**のようにホワイトボード上に、「捕まった友達」や「捕まえる側の子」を意味するマグネットや、牢屋である朝礼台を示し、可視化の支援を行った。さらに、マグネットを動かしながら「助けやすさ」や「守りやすさ」等を小集団で話し合う操作化の支援を行った。



【資料１９：ホワイトボードによる可視化、操作化】

その後、全体の傾向を可視化するために、賛成する原案にネームプレートを貼らせた。その結果、**【資料２０】**のように、ほとんどの子どもたちが「２人」に賛成することになった。



【資料２０：出し合いの結果】

イ　比べ合う段階

操作しながら考えた「２人」に賛成した理由を発表する場を設定した。

子どもたちからは、「１人にすると、鬼が不利になってしまう。」「３人だと、助けにくくて、逃げる側が楽しくなくなる。」と、操作化したことから３つの原案を比べた意見が出された。

「１人」に賛成した子どもからは、「捕まっている子の数に合わせて、守る人数を変える方がよいのではないか」という案も出された。

ウ　決める段階

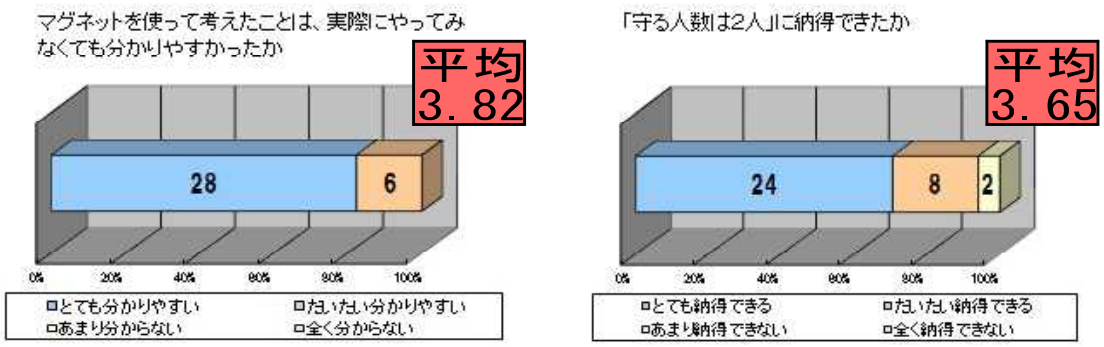
比べ合う段階の意見をもとに、具体化するために、最終的な意思の確認を行う場を設けた。

その結果、賛成する人数は**【資料１９】**に示したものから変化はなかった。そこで、「１人」に賛成した子どもたちへの確認を行うと、「１人」に納得できるということで、「守る人数は２人にする」という全員賛成型の納得解に集団決定することができた。

エ　話合いの柱②についての考察

集団決定に向け、ホワイトボードとマグネットを用いた操作化の支援を行ったことについての自己評価は、**【資料２１】**の通りである。

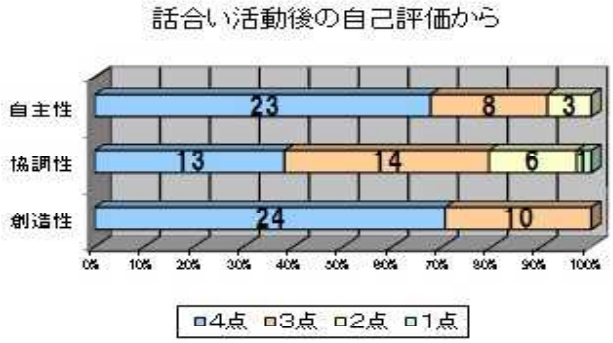
このことから、話合い活動において操作化の支援を行ったことは、めあてとの整合性から意見の根拠を明確にし、具体化につながり、全員賛成型の納得解を創る上での基準となり、高い納得の度合いにつながったと考える。



【資料２１：実践事例１の話合いの柱②における自己評価】

④　実践事例１についての考察

話合い活動と実践の後に、めざす子ども像から見たアンケートを行い、自己評価させた。その結果、【資料２２】のように、自主性と創造性について高い評価が見られた。

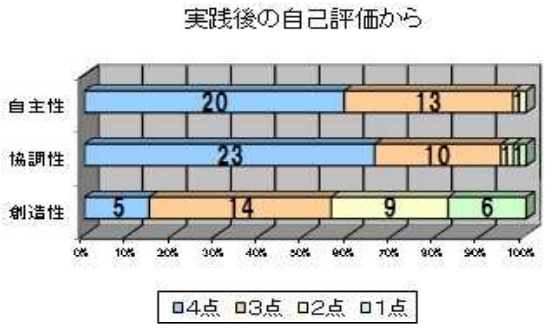


【自主性】
・自分の考えを進んで伝え、決まったことを実際にするのが楽しみですか。
【協調性】
・自分や友達の考えのよさが入ったルールになりましたか。
【創造性】
・よりよいルールにしようと考えて、話し合うことができましたか。

【資料２２：実践事例１の話合い後の「めざす子ども像」についての自己評価】

このことから、実践事例１においては、納得解を創り出す話合い活動を通して納得度の高い集団決定を創り出したことは、話合い段階での参画意識の自主性と創造性を高めることにつながったと考える。

実践に対する全体の満足度は、５段階中４．４ポイントであり、概ね高い満足度であった。めざす子ども像から見たアンケート結果は【資料２３】に示すように、自主性と



【自主性】
・自分から進んでルールを守り、楽しむことができましたか。
【協調性】
・友達も楽しんで鬼ごっこをしているのを感じられましたか。
【創造性】
・やってみて、もっと工夫したい所を考えることができましたか。

【資料２３：実践事例１の実践後の「めざす子ども像」についての自己評価】

協調性の面で高い自己評価が見られた。

このことから、参画意識を促す議題化を行ったことは、実践段階での参画意識の自主性、協調性を高める上で有効であったと考える。

実践事例２「クラスの歌をつくろう」

（１）目標と計画

【資料２４：実践事例２における研究構想の具体化】

議題「クラスの歌をつくろう」

【議題化の観点】
・歌うことで、学級目標をより意識することができる。（自主性）
・歌声を聞いたり、表情を見たりすることで、友達のよさを感じやすい。（協調性）
・「３つの原案の歌詞を取り入れる」という視点から、付加修正した歌詞をつくりやすい。（創造性）

話合いのめあて「学級のめあてに合った歌にしよう。」
話合いでめざす子どもの姿
○　めあてに合った意見を考え、進んで伝え、実行しようとする子ども（自主性）
○　友達の意見を聞きながら、よりめあてに合ったものにしようとする子ども（協調性）
○　様々な立場から原案について考え、よりよい集団決定をしようとする子ども（創造性）

話合いの柱①「歌はどれにするか」【付加修正型の納得解】

段階	学習活動	可視化・操作化・構造化・具体化の支援
出し合う	１　３つの原案のどれに賛成か、原案のよさを出し合う。	○　出された原案のよさを赤、黄、青の短冊に書き、黒板に貼らせる。（可視化）
比べ合う	２　出された意見を、「明るさ・元気」「友達を大切にする・優しさ」の観点から、分類・整理する。	○　それぞれの原案のよさを分類する表を提示し、２つの観点から原案のよさを整理させる。（構造化）
決める	３　分類・整理した結果から、ベースとなる原案に集団決定する。	○　１つの原案に２２人以上の賛成がある場合も、それに決めてもよいか、意思の確認を再度行わせる。（具体化）

話合いの柱②「歌詞はどうするとよいか」【付加修正型の納得解】

段階	学習活動	可視化・操作化・構造化・具体化の支援
出し合う	１　ベースの歌のどの部分をどんな歌詞に変えるのか、意見を出し合う。	○　他の原案の歌詞のめあてに合う部分を切り取り、ベースの歌詞に貼らせる。（可視化） ○　取り入れる歌詞を短冊に書き、ベースの歌詞の拡大図上に貼らせる。（操作化）
比べ合う	２　付加修正した原案がめあてに合っているかを話し合う。	○　出来上がった歌詞を見て歌うことで、めあてとの整合性を確かめて意見を言えるようにする。（操作化）
決める	３　付加修正した原案に賛成するかを最終確認して、集団決定する。	○　付加修正した案に賛成かどうか、意思の確認を行わせる。納得できない場合は、フリートークを行わせる。（具体化）

実践でめざす子どもの姿
○　みんなでつくった歌を、元気に進んで歌い、楽しもうとする子ども（自主性）
○　友達と一緒に楽しみながら、よさを見つけられる子ども（協調性）
○　歌うことを通して、もっと歌の内容を工夫しようと考える子ども（創造性）

（２）指導の実際と考察

①　議題化の経緯

音楽発表会に向けての練習が進み、毎日きれいな歌声づくりに向けて取り組んでいる時期に、「３年１組の歌を作って、みんなで楽しく歌いたい」という思いから提案されたものである。

この話合いでは、ベースになる歌を決め、学級目標に合う歌詞を考えようと司会グループと一緒に計画した。歌は一つにしか決められないため、話合いの柱①でめあてに合うと考えられる歌を選び、話合いの柱②でその中に選ばれなかった歌のよさを取り入れる「付加修正型の納得解」を創り出す話合い活動を計画した。

全員が原案を考えた中から、班で話し合い８つに絞り、その中からさらに３つの原案に絞った。「キセキ」「ひまわりの約束」「世界が一つになるまで」の３曲が原案として選ばれ、話合いを行うことになった。

②　話合いの柱①「歌はどれにするか」について

ア　出し合う段階

まず、事前に書かせた考えをもとに、**【資料２５】**のように、原案の歌を赤、黄、青で表し、対応する色短冊に意見を書き、黒板に貼らせた。

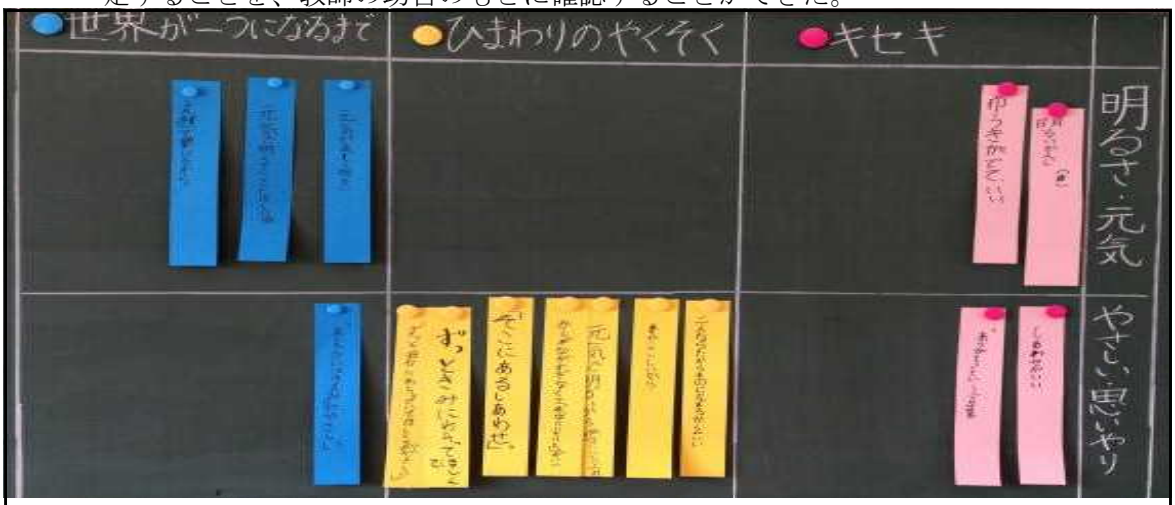
子どもたちからは、歌詞や曲の雰囲気から、めあてに合っていると考えた意見が出された。全体としては、黄色の「ひまわりの約束」への賛成が一番多くみられた。

【資料２５：色分けして板書した短冊】

イ　比べ合う段階

出し合う段階の意見から、どの原案がめあてに合っているのかを判断できるよう構造化するため、表の中に、「明るさ・元気」「友達を大切にする・優しさ」という観点で意見を分類させた。

子どもたちの意見から、**【資料２６】**のように、意見が分類・整理された。バランスよく２つの観点についてのよさがあるのは、赤の「キセキ」の原案であるという結果である。整理したことをもとに、どれが一番めあてに合っているかを考えて、集団決定することを、教師の助言のもとに確認することができた。



【資料２６：分類・整理された意見】

ウ　決める段階

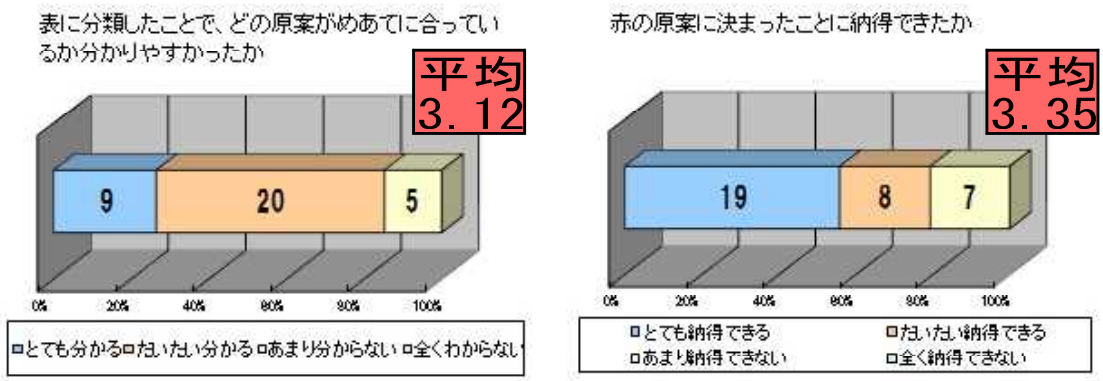
集団決定に向け、具体化するために、最終的な意思の確認をする場を設けた。

比べ合う段階の構造化から、黄色の原案から赤の原案に考えを変えた子がいたため、赤の「キセキ」の原案への賛成が２２名以上の基準に達し，集団決定することになった。

さらに、他の原案に賛成していた子も、より納得がいくものにするために、「発表された歌詞のいい所を全部入れるといいと思う。」という解決策が出され、話合いの柱②で、取り入れ方を話し合うことを決めることができた。

エ　話合いの柱①についての考察

表を用いた構造化の支援を行ったことについての自己評価は、**【資料２７】**に示す通りである。



【資料２７：実践事例２の話合いの柱①における自己評価】

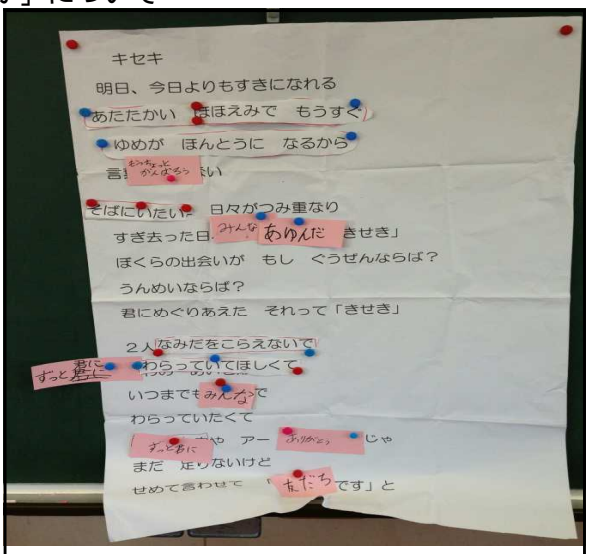
このことから、話合い活動において構造化の支援を行ったことは、めあてとの整合性を把握し、付加修正型の納得解を創る上での基準となり、高い納得の度合いにつながったと考える。しかし、実践１よりも低い結果になっているのは、構造化の視点に不十分さがあったためであると考える。

③　話合いの柱②「歌詞はどうするとよいか」について

ア　出し合う～決める段階

選ばれなかった原案の歌詞を切り取り、歌詞の拡大図上に貼る可視化、操作化の支援を行った。

子どもたちは、**【資料２５、２６】**に出された歌詞がどの部分に取り入れられそうかを考え発表していった。黒板記録の子どもたちが、それを実際に板書に示していくことで、みんなで共通理解しながら話合いを進めることができた。



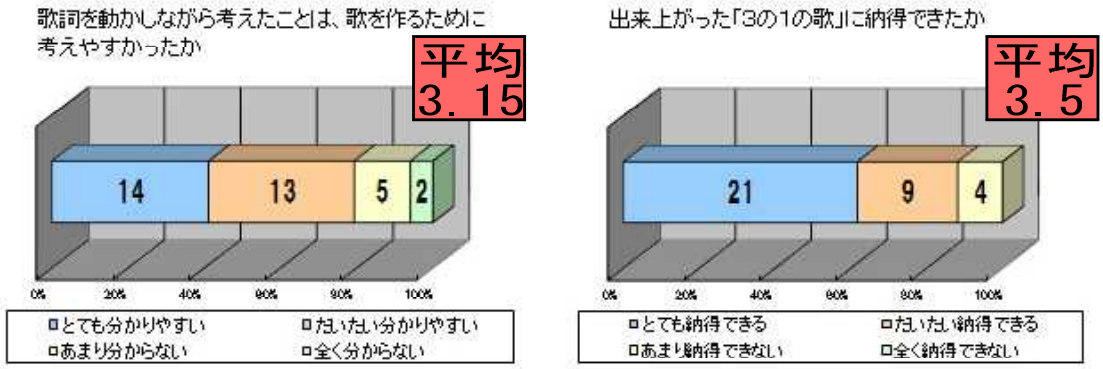
【資料２８：付加修正された歌詞】

また、出来上がった部分を操作した歌詞を見ながら歌い、メロディーに合っているか、歌詞のつながりはどうかを考えながら話し合うことができた。その結果、**【資料２８】**に示す歌詞に決定し、「付加修正

型の納得解」に集団決定することができた。

イ　話合いの柱②についての考察

歌詞の拡大図を用いた操作化の支援を行ったことについての自己評価は、**【資料２９】**の通りである。

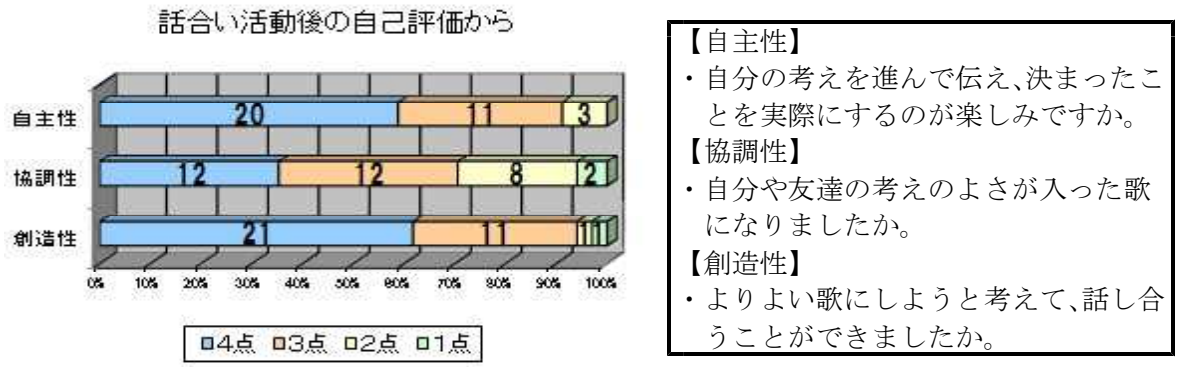


【資料２９：実践事例２の話合いの柱②における自己評価】

このことから、話合い活動において操作化の支援を行ったことは、めあてとの整合性から意見の根拠を明確にし、付加修正型の納得解を創る上での基準となり、高い納得の度合いにつながったと考える。しかし、どの部分から付加修正していくという、話合いの過程が曖昧であったことが、実践１よりも低い結果になった原因であると考える。

④　実践事例２についての考察

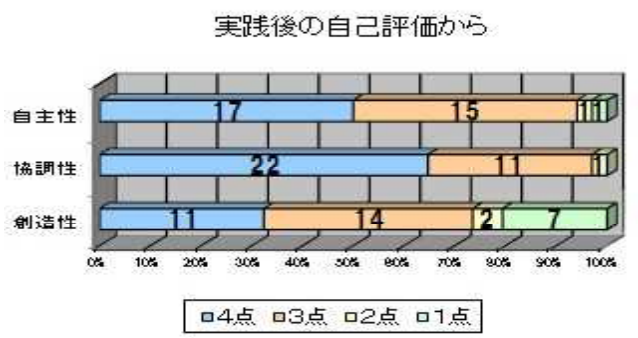
話合い活動と実践の後に、めざす子ども像から見たアンケートを行い、自己評価させた。その結果、**【資料３０】**のように、自主性と創造性について高い評価が見られた。こ



【資料３０：実践事例２の話合い後の「めざす子ども像」についての自己評価】

のことから、本実践においては、納得解を創り出す話合い活動を通して納得度の高い集団決定を創り出したことは、話合い段階での参画意識の自主性と創造性を高めることにつながったと考える。

また、実践後の振り返りでは、実践に対する全体の満足度は、５段階中３．７ポイントであり、若干低い満足度であった。めざす子ども像から見たアンケート結果は**【資料３１】**に示すように、自主性と協調性の面で高い自己評価が見られた。

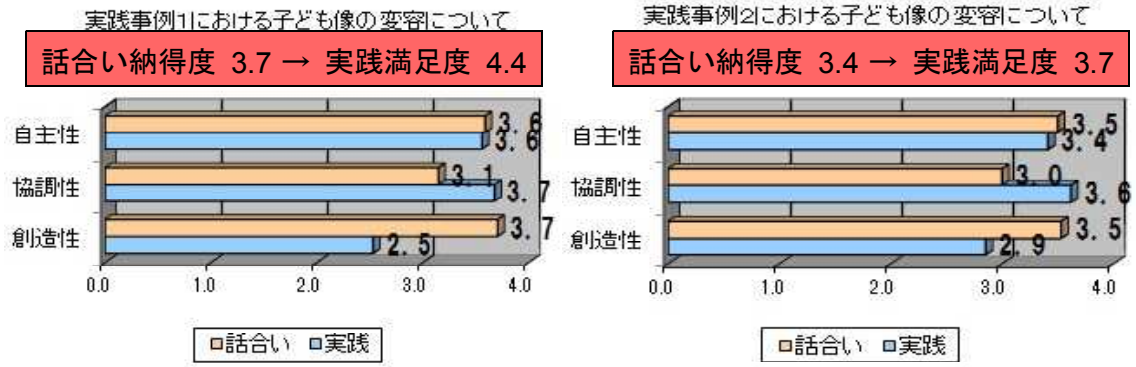


【自主性】
・自分から進んで元気よく歌い、楽しむことができましたか。
【協調性】
・友達も楽しんで歌っていると感じられましたか。
【創造性】
・歌ってみて、もっと工夫したい所を考えることができましたか。

【資料３１：実践事例２の実践後の「めざす子ども像」についての自己評価】

このことから、参画意識を促す議題化を行ったことは、実践段階での参画意識の自主性、協調性を高める上で有効であったと考える。

７　全体考察



【資料３２：実践事例１、２における「めざす子ども像」の変容について】

【資料３２】のように、話合いにおいてより納得度の高い納得解を創り出したことは、実践への満足度を高め、より高い参画意識を形成する上で有効であったと考える。

８　成果と課題

○　参画意識を促す議題化を行ったことは、自主性と協調性の面で学級生活への参画意識を高め、実践する姿につながった。

○　話合い活動における「可視化・操作化・構造化・具体化」の支援を行ったことは、納得解を創り出すことにつながり、自主性と創造性の面で学級生活への参画意識を高め、話し合う姿につながった。

○　操作化・構造化の支援をもとに、よりよい納得解を創り出すことで、話合いと実践における自主性と協調性と創造性の３点から参画意識を高めることができた。

●　集団決定の納得度が高いほど、実践における創造性が下がる傾向があるので、めざす子ども像を見直し、次の活動への見通しをもった創造性の姿を考える必要がある。

●　話合いにおける協調性の高まりは不十分であった。操作化を用いた学習過程や、構造化の視点を再検討し、よりよい納得解につながる支援を開発する必要がある。

＜参考文献＞

・文部科学省　『小学校学習指導要領解説　特別活動編』　日本文教出版　平成２０年８月
・野田敏孝　著　『初めての教育論文－現場教師が研究論文を書くための６５のポイント－』　北大路書房　２００５年